

書評: 走ることに語るときに僕の語ること(村上春樹著)

イギリスの新聞『ガーディアン』は、昔『エディター』という素晴らしい週刊誌を発行しており、その週に起こったとても読みきれない量の国内外の多量のニュースを短く一口大サイズの美味しい塊に要約し紹介していました。そこには 1,000 語レビュー、1 段落レビュー、1 文レビュー、そして 1 語レビューがありました。

偉大なアイルランド人作家オスカー・ワイルドは「本は美味しいワインのようだ。クオリティーを測るのに一樽を飲み干す必要はない。」と言いました。

彼はまた、自らの著作について「もっと短くすることはできなかったのか」と聞かれた時、「時間が足りなかったのです！」と答えました。

簡潔なサマリーである「要約」の技術と美しさは、まさに芸術です。本の要約をする時は、そのフレーバーのほんの一部分の提供に留めるのが最善だと思います。多すぎず、少なすぎない。その本の風味をほんの少しだけ、食欲を刺激しもう少し飲んでみたいと思わせるために紹介するのです。

私のこの要約があなたの趣味に合い、天才・村上春樹氏を垣間見る機会となることを願います。

もっと短く簡潔な要約にできたのにと思われたなら、おっしゃる通りです。ただ時間が足りなかったのです！

ピーター・マックリーン

www.prexcellence.com

時間がない方へ

1 段落レビュー

人生、哲学、明晰な頭脳に対する洞察。人生の美しさを最大限体感するイベント。瞑想としてのランニングの楽しさ、そして人生の比喩としての痛みを耐え克服する技術習得の喜び。

1 文レビュー

ランニングの美しさを通した、人生における最も重要な質問への洞察。

1 語レビュー

人生。

900 語レビュー

※単語数は英語原文による

村上春樹は、日本の歴史上最も偉大な作家の一人である。彼はジャズバーの経営者となった後、作家に、哲学者に、そしてランナーになった。その著作は人間の精神の感情領域への洞察をもたらす。読者は自分自身や他者、その気持ちや世界に対して疑問を持ち、なぜそれらが存在しているのかと問わざるを得ない。

村上春樹の優れた著作である『走ることについて語るときに僕の語ること』において、彼は人生とその意味を見つめ、そのよく構成された美しい文章を通して自らの思考を解説し、感情に触れ、意味をもたらす。彼の思考は深い疑問を投げかけ、さらに奥深い感情、表現、人間の弱さに触れ、そして何百万という人々の共感を呼ぶ。彼はこうした思考を色とりどりの特別な人間万華鏡を通して、彼が「空白」と呼ぶ走る時にのみ生まれる特別な精神空間において行う。

村上氏にとって、ランニングはセラピーである。季節の移り変わりやマラソンで大勢の人に囲まれることについてこう語る。「そんな実感を伴った流れの中で、僕は自分という存在が、自然の巨大なモザイクの中の微小なピースのひとつに過ぎないのだと認識する。川の水と同じように、橋の下を海に向けて通り過ぎていく交換可能な自然現象の一部に過ぎないのだ」。

彼は人生とその目的について度々思い巡らし、もしあるとすれば「効率の善し悪しだけが我々の生き方の価値を決する基準ではないのだ」と言う。

彼はマラソンを人生の比喩、そして、学びとして捉え「痛みは避けがたいが、苦しみはオプション(こちら次第)」と語る。「たとえば走っていて『ああ、きつい、もう駄目だ』と思ったとして、『きつい』というのは避けようのない事実だが、『もう駄目』かどうかはあくまで本人の裁量に委ねられていることである。この言葉は、マラソンという競技のいちばん大事な部分を簡潔に要約していると思う」と言う。そして、それは人生にも当てはまる。

孤独が、穏やかで美しい開かれた心とともにあると、クリエイティブで色彩豊かな新しい考えが浮かぶ。これは素晴らしいことである。偉大な心理学者エーリッヒ・フロムは名著『自由からの逃走』において、ほとんどの人間はひとりで深い思索にふけることを好まず、人生における答えのない疑問が持つ現実や恐怖、非道さを恐ろしく感じるため、私たちの多くがそれを避けるためにありとあらゆることをして人生の空白を埋めようとする主張した。

しかし私は、これはマラソンランナーには当てはまらな^いと考える。ランナーは、孤独な道や風の中に安らぎを見出す。その瞬間にしなければなら^ない緊急の用件はなく、走るために丸一日を費やす。

村上氏は「僕はどちらかという^と一人であることを好む性格である。いや、もう少し正確に表現するなら、一人であることをそれほど苦痛としない性格である。」と説明する。

「僕は原則的には空間の中を走っている。逆の言い方をすれば、空白を獲得するために走っている、ということかもしれない。」

「走っているときに頭に浮かぶ考えは、空の雲に似ている。いろんなかたちの、いろんな大きさの雲。それらはやってきて、過ぎ去っていく。でも空はあくまで空のままだ。雲はただの^{ゲスト}過客に過ぎない。それは通り過ぎて消えていくものだ。そして空だけが残る。空とは、存在すると同時に存在しないものだ。実体であると同時に実体ではないものだ。僕らはそのような茫漠とした^{いれもの}容器の存在する様子を、ただあるがままに受け入れ、呑み込んでいくしかない。」

村上氏は語る。「大事な^なのは時間と競争をすることではない。どれくらいの充足感を持って42キロを走り終わられるか、どれくらい自分自身を楽しむことができるか、おそらくそれが、これから先より大きな意味をもってくることになるだろう。数字に表れないものを僕は愉しみ、評価していくことになるだろう。」

「長い距離を走ることはもともとの性格に合っていたし、走っていればただ楽しかった。走ることは、僕がこれまでの人生の中で後天的に身につけることになった数々の習慣の中では、おそらくもっとも有益であり、大事な意味を持つものであった。そして二十数年間途切れなく走り続けることによって、僕の身体と精神はおおむね良き方向に強化され形成されていったと思う。」

つまり、本書は人生についての本である。そしてランニングは私たちの多くが選ぶ人生の過ごし方の一つなのだ。

村上氏はボストンでのランニングや、アテネで2,500年以上の歴史を持つオリジナルのマラソンコースを走った経験を見事に描写する。ニューヨークとそこで開かれる大会がいかに特別か。日本でのランニングの美しさ等々。

旅するために走り、走るために旅するという喜び。

人生においてどちらも欠かすことのできない、孤独でいることとコミュニティーに属すること、それぞれの美しさ。レースに出るための旅がもたらす、すべての経験と出会いによる喜び。

人生はマラソンである。自分のペースで歩もう。偉大な作家ヘンリー・デイヴィッド・ソローも言っている。「私たちはどうしてこんなに必死になって社会的成功を急ぐのか。もし周りのペースについていけない人がいるとしたら、それはきっと彼には異なるドラムの音が聞こえているからである。どんなにゆっくりでも、どんなに遠くでも、自分の耳に聞こえる音楽に合わせて歩めばいい」と。

書評: 走ることについて語るときに僕の語ること(著者/村上春樹) 出版: Random House

www.vintage-books.co.uk

AIMS 国際マラソン・ディスタンスレース協会

<http://aims-worldrunning.org/calendar.html>